

文=五月女善重
(五月女総合プロダクト)

感謝のもと

「社長にとつて、社員とは、どういう存在ですか?」

学生と面接をしていると、こんな質問をよく受けます。社員からこういった掛けをされる事はまずありませんから、学生らしいピュアナ質問です。

僕はこんなふうに答えます。

「会社があつて社員がいるのではなく、社員がいるから会社があるのです。ですから、とても感謝している存在です」

勉強会や会合などで、さまざまな業種

——創業社長に違いない——と瞬時に思いい、予感は的中しました。

僕たちはお坊ちゃん育ちの二代目ですから、ゼロから会社を興す苦労を知りません。二代目としての心労やプレッシャーはありますが、創業者に比べたら、確かにラクをしていると思っています。

ですから、N社長から

「私は創業者だからラクなんですね」という言葉が出たときには、本当に驚きました。僕の中には「創業者」大変な苦労を負った人」という図式があつたのですから——。N社長は続けます。

「創業者は、好きな事が出来るじゃないですか。二代目だったら『お伺い』を立てる必要もあるでしょうが、私は自分が考えた事を、すぐ行動に移せますからね。座右の銘は、『先手必勝』ですし」

だから責任も負わなきやイケナイけどね、とN社長は微笑みます。経験に裏打ちされた余裕のある物腰に、心の内を見透かされたようで、僕は観念した気持ちになってしまいまし

が身に付いたのも、コンプレックスの裏返しかもしれません。起業の辛酸を知らずして社長の座に就いた引け目が、今も心のどこかで膝を抱えているのです。

そんな中、ある社員が「お話があります」とやって来ました。

「私は一生、この会社でお世話になる事に決めました。家内も同じ気持ちです」

中途入社して働く中で、この先ずっと会社と共に歩む決心をしたと言うのです。夫婦揃って故郷を遠く離れるのは、退路を断つ覚悟と、ご家族の理解が必要だつたでしょう。「僕を信頼してくれた」のだとと思うと、嬉しくてたまらない気持ちと同時に、思いに報いなければと、改めて身が引き締またのです。

そう、社員から見たら、僕が二代目であろうと「社長」である事に変わりはなかったのです。二代目のコンプレックスを抱えながらも、「感謝のもと」である彼らを支えに、今日も前進していくのです。 [A]

の経営者の方にお目に掛かることがあります。なぜか「この人は創業者だ」「彼は二代目だろう」、そんなことをフッと感じじる瞬間があり、ほぼ100%の確率で当たります。それは自分でも不思議な感覚です。

あるとき、異業種のN社長とご挨拶する機会がありました。年齢は僕と変わらないのですが、柔軟な瞳の中に揺るぎない自信をたたえ、人間的な魅力あふれる併まいのN社長に、

創業社長の方々に

対し、僕はある種の劣等感があるようですが、経営者を瞬時に

「二代目だ、創業者だ」と見分ける能力



さおりめ・よしげ

五月女総合プロダクト株式会社代表取締役社長。大学卒業後、父親の営む建築資材会社を経て、26歳でホール業界に。釘調整など現場仕事を経験する中で「自分の代になる」という強い意思のもと2000年に屋号をライブガーデンに変更、2003年代表取締役就任。「スタッフが主役の会社づくり」を掲げ、栃木県南部を中心に現在9店舗を経営。1965年生まれ。筆者へのメッセージはホームページから
<http://www.saotomesp.jp/>